「校長室の窓から」	令和８年（2026）５月 19 日（火） 第 12 号　　発行：隈元　優一

先日、５月１６日（土）の育友会総会に続き、外部講師をお招きし「高校生の就職活動」と題して生徒・保護者合同進路講演会を開催いたしました。大変示唆に富むお話をいただき、今後の進路選択において、その要点についてお伝えいたします。

1. 高校生就職の現状　―「超売り手市場」に潜む課題　―

現在、高卒の求人倍率は 3.52 倍（大学生の約 2 倍）に達しており、生徒一人に対して複数の求人が寄せられる、いわば「選べる時代」となっています。

一方で、新卒３年以内の離職率は約 40%と依然として高く、その主な要因は「仕事のミスマッチ」「人間関係」「条件の確認不足」にあります。この現状を踏まえ、いかに自分に合った進路を見極めるかが、求められています。

▲　進路講演会の様子

2. 後悔しない選択のために　―　今、取り組むべきこと　―

７月の求人票公開から９月の選考開始までは、わずか２か月半しかありません。だからこそ、５月から６月の行動が、将来を大きく左右します。

（1）自己分析で「自分の軸」を明確にする

適性検査等も活用しながら、「自分は何にやりがいを感じるのか」「どのような場面で力を発揮できるのか」を見つめ直し、自らの強みを言葉にしてみましょう。

（2）条件面だけで判断しない

給与や休日といった条件だけで選ぶと、困難に直面した際に踏ん張りがききません。企業の理念や社風に目を向け、「その会社でどのように成長したいか」という視点を大切にしてください。これが職場への定着や良好な人間関係につながります。

（3）９月の１次選考を見据えた準備を進める

人気の企業は１次選考でほぼ定員に達します。先延ばしにすることなく、今から具体的な準備を進めることが重要です。

3. 保護者の皆様へのお願い　―　見守りと支援の姿勢　―

限られた期間の中で適切な選択を行うためには、保護者の皆様の支えが不可欠です。

（1）情報収集へのサポート

ぜひお子様と一緒に学校の求人システムをご覧いただき、どのような企業があるのかを共有する中で、視野を広げる機会としていただければ幸いです。

（2）最終的な決定は「本人」に委ねる

保護者として進路を勧めたくなるお気持ちはごもっともですが、他者の判断に依存した選択は、将来困難に直面した際に主体的な行動を妨げる要因となり得ます。

自ら悩み、考え、選び取った進路であるからこそ、責任を持って歩み続ける力が育まれます。

どうか最後はお子様の決断を信じ、温かく背中を押していただきますようお願い申し上げます。

今回の進路選択は、社会人としての第一歩であると同時に、大きく成長する機会でもあります。学校と家庭が連携しながら、生徒たちの未来を共に支えていきましょう。今後とも変わらぬご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

未来を生きる子どもたちのために ～次期学習指導要領への動き～

先日、全県教育委員会研修会に参加してきました。講師は、文部科学初等中等教育局教育課程学校教育官岩岡寛人氏による次期学習指導要領の講話でした。ここでは講話の一部をお伝えします。

現在、文部科学省では約10年に一度行われる「学習指導要領（学校の教育カリキュラムの基準）」の次期改定（令和9年告示予定）に向けた本格的な議論が進められています。そこには、激変する社会を生き抜く子どもたちへの、強い願いが込められています。今、学校教育が向き合っている社会背景と、これからの学校が変わる方向性について、皆様にお伝えしたいと思います。

□AI時代に求められる「人間ならではの力」

生成AIをはじめとするテクノロジーの進化は目覚ましく、データ処理や事務作業はAIが圧倒的に得意な時代になりました。また、労働力不足が進む未来では、生涯で何度も学び直し、異なる仕事に挑戦する人生が当たり前になると言われています。

このような時代を生きる子どもたちに必要なのは、単なる「テストのための丸暗記」ではありません。

▲ 研修会場前の様子（三田市）

第一に、自ら問いを立て、新しい世界を描き出す力。

第二に、異なる価値観を持つ人と対話し、力を合わせて合意形成する力。

第三に、自分の「好き」や「得意」を突き詰める力です。

次期指導要領では、これまでの「苦手を平均的に潰す教育」から、子どもたちの「好きや得意を伸ばし、社会へつなげる教育」へと軸足が移される予定です。

□具体的に変わる学校の姿

今後、学校では以下のような大改革が予定されています。

情報教育の強化：小学校では総合的な学習の時間の中に「情報の領域」を新設し、中学校では「情報技術科」という新しい教科が誕生するなど、デジタル社会を賢く生き抜く力を育てます。

評価の改善：提出物の期限や挙手の回数といった表面的な行動だけで評価するのではなく、失敗しても「次はどうすればいいか」と自分で工夫し、粘り強く学ぶ姿勢そのものを大切に見取っていきます。

多様性の包摂：不登校や発達の特性、特別な才能を持つお子さんなど、一人ひとりの状況に合わせた柔軟な学びの場や、個別最適な目標設定ができる仕組みを整えます。

□おわりに

変化の激しい時代だからこそ、学校は子どもたちにとって「安心して失敗でき、自分の可能性にワクワクできる場所」でなければなりません。家庭・地域・学校が同じ未来のビジョンを共有し、子どもたちの「学びの伴走者」として共に歩んでいければ幸いです。